

や実際に支援に携わる方に対する支援はほとんど行われていないのが現状である。そこで、支援者に対する支援をより適切に行うために、発達障害の方への態度や発達障害に対する認識の構造について明らかにしておく必要があるのではないだろうか。そこで本研究では、このような障害のある方に対しての態度や障害についての認識の仕方、障害についての考え方を“障害意識”と定義し、認識的側面である障害者観と態度・行動的側面である障害者に対する自己効力感の二つに分けて調べ、障害意識に影響を及ぼすと考えられる要因を明らかにし、適切な心理教育プログラムの作成を目指すものとする。

〔調査対象者〕北海道S市にある国立大学、私立大学生に対して調査用紙を配布、倫理的配慮を説明し、研究主旨に同意していただける方に記入してもらった。配布数304部、回収221部で回収率は73%である。有効データは207であった。平均年齢21.66歳(SD=2.81)、男性91名(44%)、女性116名(56%)、現在の教育的背景は心理学、福祉学、教育学、その他である。

〔調査内容〕発達障害(知的障害(精神遅滞)、自閉症)に対する障害意識と障害に対する関心の程度、接した経験の程度、性差、自己肯定意識との関連を調べた。

〔結果〕①発達障害に対する関心：発達障害に対する関心は障害意識に影響しなかった。これは、発達障害が犯罪と関連しているというマス・メディアの報道などの影響を受け、必ずしも発達障害への関心が肯定的な障害意識に結びつかないことが背景となっている可能性が考えられる。また、発達障害に関して積極的に学ぼうとする機会が少ないことが考えられる。②発達障害の方と接した

〔経験〕発達障害の方とボランティア活動程度での障害者と接した経験では、障害意識に対する発達障害の方と接した経験の影響は、本研究の結果からは見出すことができず、接した経験の期間や内容が影響すると考えられる。③自己肯定意識：自己肯定意識が障害意識に影響を及ぼしていたのは、唯一自閉症における障害条件であり、自閉症

に対しては、自己肯定意識が高ければ、自閉症の方と接した場面でより積極的な態度をとるということが考えられる。④性差：男性の方が女性と比較し障害意識が高いという結果から、男性の方がより発達障害についての態度形成や認識が肯定的であると考えられる。

〔考察〕以上の結果から、心理教育を行う際には個人の心理的状況(自己肯定意識)に焦点を当てることが重要であろう。また、障害児・者支援において障害のある方のみに関わるのではなく、その方を取り巻く対人的環境にも視野を広げていく必要がある。たとえば、臨床心理士がスクールカウンセラーとして学校現場で活躍する際にも、心理教育を取り入れ、一人ひとりの子どもの心理的成長を促すような取り組みが行われなくてはならない。

河内清彦(2004). 障害学生との交流に関する健全大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件、対人場面及び個人的要因の影響 教育心理学研究, 52, 437-447.

#### 4. 保育現場における「気になる」子どもに関する生態学的視点からの検討

角田 純

〔目的〕近年、保育現場で保育者から「気になる」ととらえられる子どもが増加しているといわれ、「気になる子ども」の保育をどのように進めるかが問題となっている。「気になる子ども」という表現は、保育者の主観的な子どもの理解・評価・判断の仕方であると考えられる。従って、保育者の保育に対する価値観や考え方が異なると、「気になる」と判断する特徴が異なることが考えられる。しかしながら、本邦では保育者の要因を考慮した研究が少ない。さらに、報告されている「気になる子ども」の特徴は様々であるために、「気になる子ども」の概念は非常に複雑である。「気になる子ども」の保育や保育者支援を考えるためには、保育者に「気になる」ととらえられる特徴を明らかにする必要があると思われる。そこで本研究では、生態学的・相互作用的人間発達理論に

基づき、施設の違いなどの環境要因を考慮し、保育者の「気になる」という理解・判断に影響する要因について検討する。「気になる」ととらえている保育者の「気になる」行動の評定と、保育に対する考え方や保育観、「気になる」子どもの個体要因との関連からこれらを明らかにする。

【方法】札幌市内に開設されている市立・私立の幼稚園・私立認可保育所に在籍している保育者を研究協力者とした。施設への訪問または郵送にて調査用紙を配布し、回収された360名のデータを分析対象とした。研究協力者が現在担当しているクラスの中で、参加者が保育・指導が難しいと感じる子どもを1名挙げてもらい回答してもらった。

【結果】研究協力者の平均経験年数や教育歴などの属性は、市立・私立幼稚園・私立認可保育所といった施設ごとに異なっていた。「気になる」行動評定の因子分析の結果、行動に関する気がかりと情緒に関する気がかり、そして発達の違いや障害の疑いに関する気がかりの3因子が抽出された。保育者の保育観の因子分析の結果、幼児との関わり経験、知識・保育観、保育者に求められるスキルの3因子が抽出された。これらの因子得点は施設や保育者の教育歴などで有意な差が見られた。「気になる子ども」の行動評定を目的変数、保育観と子どもの年齢や障害の診断の有無といった生物学的特徴および保育者の保育観、保育者の経験年数など保育者の要因を説明変数とした、ステップワイズ法による重回帰分析を実施した。重回帰分析は、施設ごとに保育者の属性が異なっていたことから異なる母集団であると判断し、施設ごとに実施した。その結果、施設ごとに投入された変数が異なっており、保育者の保育観は投入されなかった。投入されたのは、子どもの生物学的な変数や、保育者の研修や支援という変数だった。発達に関する気がかりでは、障害の有無が強く影響していた。私立認可保育所では、育児経験の有無が唯一投入された。

【考察】保育者に「気になる」ととらえられる特徴は、行動・情緒・発達の3つの領域が明らかと

なった。重回帰分析の結果、これらの変数には保育者の保育に対する考え方や保育観という要因が影響せず、子どもの障害の有無などの生物学的な特徴、保育者の支援体制や研修機会などの要因が「気になる」という判断に影響を与えることが示唆された。幼稚園と認可保育所で投入された変数に差異が見られたが、これは幼児教育と育児という保育の性質の違いが表れていると考えられた。従って、「気になる子ども」の保育や、「気になる子ども」を担当している保育者への支援を考える際に、施設ごとの保育の文脈を考慮した保育コンサルテーションが必要であることが考えられる。ところで、本研究で明らかになった「気になる」特徴は、客観的な子どもの特徴ではない。今後は、客観的な子どもの観察研究と、保育者の「気になる」特徴との関連について検討する必要がある。

#### 引用文献

- Bronfenbrenner, U. (2005). Ecological System Theory. In U. Bronfenbrenner (Ed.), *Making Human Being Human: Bioecological Perspectives on Human Development*. (pp. 106-173), Thousand Oaks: Sage Publications.
- Sameroff A. J. (2000). Dialectical processes in developmental psychopathology. In A. J. Sameroff, M. Lewis & S. M. Miller (Eds.), *Handbook of Developmental Psychopathology Second Edition* (pp. 23-40). New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers.

### 5. 幼児期の子どもをもつ母親の育児態度と成育歴の認識に関する検討

#### — 育児ストレスとの関連から —

栗林 春奈

本研究では育児支援を考えるにあたり、心理臨床の立場での子育て支援として、育児ストレスと<育てる者>の育ちのあり方を理解することと、現在の子育ての態度との関係を明らかにし、関係発達の立場から精神的な育児支援の必要性を考察した。

長野県内114名、札幌近郊61名、合計175名